

シリーズ

お互いの方でまちづくり ⑩

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

「自慢できるものが真の観光資源」ということを、私は常々いっています。ところが、

全国のまちをお訪ねしてよく耳にするのは、「いやあ、このまちには、自慢できるものは、なにもありません」「観光資源となるような材料がありません」といわれることです。初めから「ないないづくし」でそう決めてかかっては、何も生まれません。

まちの名前で

観光客を呼ぶ

6年ほど前のことですが、

福島県の只見というまちに行きました。

地元の有志の方たちが、「夏はどうにか観光客がくるんですが、冬はさっぱりですよ。何もありませんけど、いい方法はありませんかね」と口々にいいました。

そこで私はこう考えました。「ないことはありませんよ。只見というまちの名前がありますよ。名前を売ったらいいでしょう。冬、人がこないんだったら、ただで芝居ぐらい見せることをやったらどうですか」

すると、居合わせた人たちの

目が輝き、すぐさま実行に移したのです。「よし、おれがフィルムを借りるから映画会をやらう」と、商工会の会長さんが、かつて映画館を営んでいた人で、

足元をみつめているか

話がとんとん拍子に進み、イベントが実現しました。こうして『ただみ（只見）映画祭』が行われました。

会場は屋外にセツトし、スクリーンは降り積もった雪でこしらえました。観客はコートでのりを立てて……

奇妙なアイデアに、マスコミが書き添えました。みんなが自信をもつようになったのです。



笹っ葉に目をつけ

観光資源に

それまで「何もない」という人たちが、自分たちのまちの名前を、観光の材料としてとらえたのです。

笹っ葉ばかりしかないと思っていた人たちが、次にはこの笹っ葉に目をつけ、これで何かをつくれなにかと考えました。そして、笹を粉末にして混ぜた「そば」が誕生したのです。「笹そば」、これが爆発的に売れているそうです。

自信をもった若者たちは、お金を出しあって、「夢・食・人」という有限会社をつくり、いろいろ新しい商品を開発しました。

「まち」も商品なのです。そのまちに愛着をもてば、おのずと自慢できるもの一つや二つは出てきます。足元をみれば、材料はいくらでもあると思うのです。

しかし、わたしたち日本人は、ともすれば、自分の住んでいるまちのことをよく知りません。いろいろなまちを訪ねて案内してもらった際に、そう思います。わたしたちは、そこに住むかぎり、もつともつと、地元のことを知らなくてはいけないと思うのです。

地元のことを もつとよく知ろう



子どもたちが自慢できるまちにしたいですね